

金沢市銚子町採集の瓦について

柿田祐司



採集された軒丸瓦

平成15年11月11日、金沢市銚子町在住の得能武さんが、石川県埋蔵文化財センターに1点の瓦を携えて来られた。写真の軒丸瓦がそれである。得能さんは、その瓦について詳細を調べに来られたとのことであった。

小嶋調査部長と柿田が応対し、採集時の状況等についてお伺いしたところ、大雨が降って増水した自宅付近の、浅野川に流れ込む小川の底から採集されたとのことであった。この瓦が古代の瓦であること、また重要な遺物であることなどを説明し、しばらくお預かりして写真や実測図作成等行

えないかをお聞きしたところ、快諾していただいた。また後日瓦をお返しに上がる際に現地を案内していただくことになった。

写真撮影と実測図作成等を完了した後、11月27日に得能さん宅を調査部長とともに訪ね、現地の案内とお預かりしていた軒丸瓦、そして作成した実測図等の資料をお渡しした。現地は、山からの急斜面を滝のように小川が下り降り、浅野川に注ぐ直前に池のような溜まりを形成した場所であった。その溜まりの中に瓦があったと案内していただいた。

その場所の状況から判断すると、採集場所近辺に窯跡があるとは考えられないところであった。おそらく山側の方から水とともに転がり落ちてきたものであろうと考えられた。事実、金沢市末窯跡群が所在するのは段丘の中ほどまでで、下りきった下段の部分で窯跡は発見されていない。また、浅野川のそばということもあり製品の集積場であり、瓦を運んだ舟着場が近くにあるのではとも考えたが、現状で見る限りそのような場所でもなかった。山側の方に瓦を焼成した窯跡があり、大雨が降ったことで転がり落ちてきたものとするのが自然である。

採集された軒丸瓦

採集された瓦は、軒丸瓦の瓦当面の破片である。上端部が欠損しており、瓦当文様も全て残っていないわけではない。現存している部分からその径を推定すると約15.6cmとなる。表面の色調は全体に黄褐色であるが、割れ口の断面を見ると灰色である。胎土を観察すると、粘土素地は粒子が粗く砂礫等はほとんど含まない。末窯跡群産の須恵器と肉眼で見た胎土の印象はほとんど変わらない。

瓦当文様の型式は平城宮式といわれるものに類似し、重弁10葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+6で、線鋸歯文縁となっている。瓦当文様の細部を見ると細かい木目が観察できる。裏面には布目が若干観察でき、丸瓦との接合はその痕跡から指ないしヘラ状の工具で行っている。断面を観察すると、まず文様中心部に粘土を貼りその後側面に粘土を充填し、さらに粘土円盤を貼っているように見える。丸瓦との接合をどの段階で行っているのかまでは分からないが、割れ方から見ると范型から瓦当面を外さずに丸瓦を接合していると考えられる。瓦当側面はヘラ状の工具で削っているように見える。



採集地点を指す得能武さん



採集地点の遠景

金沢市末窯跡群

採集地点から南側の丘陵にある末窯跡群は、金沢市の市街地から東南部、犀川と浅野川に挟まれた丘陵上に展開する窯跡群である。須恵器生産および土師器生産が行われていたことが知られている。須恵器窯跡は末・辰巳・浅川の3支群に大別され、25基程度分布していると考えられている。末窯跡群では8世紀中頃に須恵器生産が始まり、9世紀前半の内に終焉を迎える。土師器生産は9世紀後半までは続いていたと考えられている。

1951年に沼田啓太郎が須恵器を発見して以来、当埋蔵文化財センター調査部長小嶋芳孝による分布調査などが行われてきた。金沢平野の古代の開発を考える上で貴重であることは言われてきたが、周辺の開発により多数の窯跡がすでに消滅していると考えられている（北野1999）。

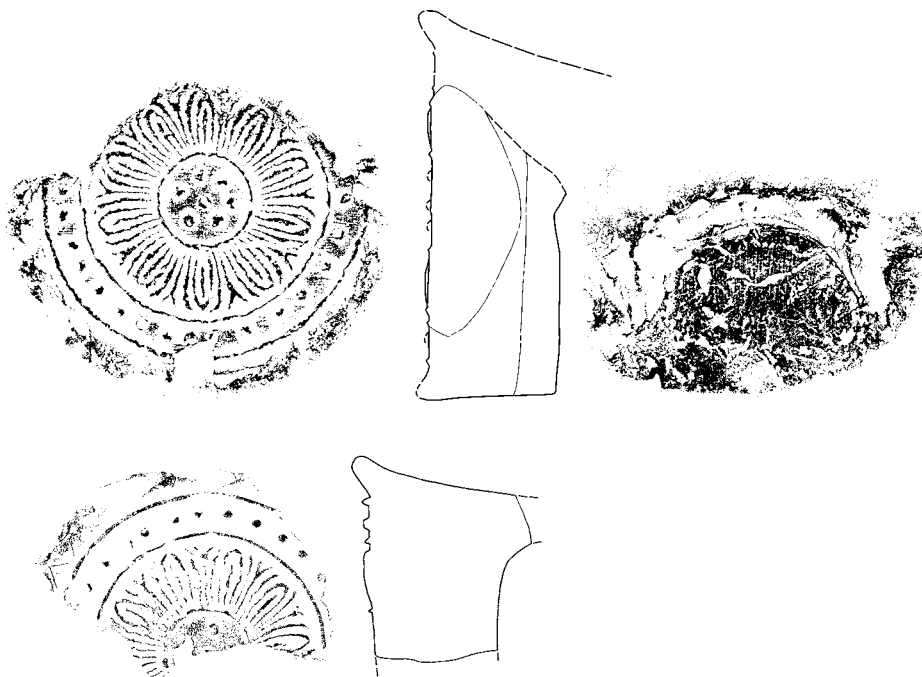
軒丸瓦が採集された地点は、浅川支群の北側にある。ちょうど浅川7号窯の北側にある谷から下の方に降りると採集地点に達する。浅川7号窯の製品であると言えるわけではないが、周辺から落下してきた可能性は十分にある。また瓦が最も多く散布しているSA-A地点からは、平城宮式の軒平瓦が採取されている。1986年に金沢市教育委員会により発掘調査された浅川3号窯でも瓦が出土している（出越1989）。

関連資料

金沢市・金沢市教育委員会が金沢21世紀美術館建設に伴い発掘調査を実施した広坂遺跡は、平成8～12・14年度に調査が行われた。遺構の大半は近世の武家屋敷に伴うが、他に中世の館跡と見られる遺構や、古代の遺構も検出されている。古代の遺構はそれら中・近世の遺構により破壊され、その詳細はあまりよく分かっていないようだが、竪穴建物・掘立柱建物・土坑・区画溝・柵列・瓦溜等が検出されている。瓦は大量に出土しており、古代寺院（広坂廃寺）があったことはほぼ間違いない。瓦の型式は藤原宮式・平城宮式であることから、白鳳時代末頃に創建されたと考えられている。藤原宮式は石川県内では初出であり、平城宮式の軒丸瓦も初めての出土であった。胎土から平城宮式のものとは末窯跡群産と考えられた（熊谷1997）。また、藤原宮式の瓦は胎土の特徴から、金沢市観法寺窯跡群で生産されたものと考えられている⁽¹⁾。

採集された瓦と広坂廃寺で出土したものと比較するために、金沢市埋蔵文化財センターで広坂廃寺の瓦を見せていただいた。広坂廃寺は、金沢市観法寺窯跡群産の製品を当初用いているが、その後金沢市末窯跡群の製品を用いて建物を建立していると考えられている。時期差はおおよそ20年あり、一度に伽藍全てを建立したのではなく、徐々に整備していったものと考えられている。また能美窯跡群





第2図 銚子町採集軒丸瓦（上）と金沢市梅田B遺跡出土軒丸瓦（下）（ $S = 1/3$ ）

産の瓦や南加賀窯跡群産の瓦も出土しているが、これらには軒瓦はなく、補修瓦と考えられている⁽²⁾。

観法寺窯跡群から北に約1kmの所に金沢市梅田町B遺跡がある。この遺跡から末窯跡群産と考えられる軒丸瓦が出土している。報告済みのものと比較すると、ほぼ同範と考えてよいほど似通っている。ちなみに1997年の調査でも軒丸瓦は出土しており、まだ未報告だがこれも同範かもしれない。ほかにも観法寺窯跡群産のもの、南加賀窯跡群産と考えられる瓦が出土しており、寺跡があった可能性がある。

おわりに

銚子町で採集された8世紀中葉の軒丸瓦1点は、末窯跡群で採集されたものではない。しかし、採集場所を考えると間違いなく末窯跡群産といって良く、同様の瓦当文様・胎土をもつ広坂廃寺、梅田B遺跡出土の瓦も末窯跡群産であることは疑いのないものになったいえる。

最後に、採集品を紹介するに際し快諾していただいた得能武さんに感謝いたします。

注

（1）金沢市埋蔵文化財センター出越茂和氏のご教示および観法寺瓦窯製品との対比による。

（2）金沢市埋蔵文化財センター出越茂和氏のご教示による。

引用・参考文献

柿田祐司ほか2004『梅田B遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター

北野博司1999「末窯跡群」『金沢市史』資料編19考古 金沢市

楠正勝・庄田知充2004『石川県金沢市広坂遺跡（1丁目）』測量図編 金沢市埋蔵文化財センター

熊谷葉月1997「動向加賀」『北陸古代土器研究会』第7号 北陸古代土器研究会

谷口宗治2001『金沢市末古窯跡群Ⅱ』金沢市埋蔵文化財センター

出越茂和1989『金沢市末古窯跡群』金沢市教育委員会

奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会